ケは *Metzgeria japonica* (Hatt.) Kuwah. となり，日本産雌雄同株のフタマタゴケは *Metzgeria conjugata* Lindb. **ドウシュフタマタゴケ**（新称）が加って3種となる。

200種を超えるフタマタゴケ科の中，雌雄同株はわずかに14種知られているが，これらの種の形態的特徴は非常に近く，又，地理的変化に方向・連続性がみられる。7,8年前，フタマタゴケ科の亜属，節等の subdivision の試みとして，Sect. Monoica なるものを一時設けていた程である。これら14種の形態的類似性は非常に強く，この形態変化域を超える雌雄同株のフタマタゴケが見出されることは一寸なさそうに思われる。

○武田久吉博士を懐う（小林義雄） Yosio Kobayasi: Dr Hisayoshi Takeda.

昭和25年度から行なわれた尾瀬ヶ原総合学術調査の結果は28年に報告書“尾瀬ヶ原”の名で発表された。それから丁度4半世紀を経た本年には当時の若者，今はオールドボーイズとなった面々を中心として尾瀬の再調査が進められている。尾瀬と云えば，ここを終生愛し続けた武田博士が直ちに連想される。私も関東大震災の翌々年，前橋を起点として赤城を越え，尾瀬に遊び，長蔵翁さんの案内で燧ヶ岳に登ったが，武田博士は既に日露戦争の年に日光より金精峠を越えて尾瀬を訪れ，その旅行記を“山岳”第1年1号（1906）に発表して居られるから，博士から見れば私はまだ若輩に過ぎない。

さて，この数日来，私は尾瀬関係の手持ちの資料をあれこれと改めて居るうちに，今更らながら武田博士をなつかしさの情が走馬燈のように次から次へと湧き，その2—3を書き留める気になった。氏は昭和47年6月7日に89才で天国へ旅立たれたが，今日がその6年目の命日であるのも奇縁である。

氏が官界にあった期間は極めて短く，永年民間に在って専門の植物学に連らなる山岳や，それから尾をひく山地の民俗，石仏にまでも関心をひろめ，趣味の対象とされた。私のように氏とはそれほど深いおつきあいがあった訳ではなく，直接に御指導を受けたこともない身ながら，氏の言行や人品骨柄にひかれる点が多いことから推せば，それぞれの分野で氏に直接に接した人々が氏を追慕するの念はさこそと思われる。

氏が毒舌家であったことには定評があった。男の多くは年を経ると好々爺になり，話すことや書くことに角がとれる。しかしそれは使い古した家具のようなもので，老人ぼけの一現象かも知れない。氏の場合には是と異り，最後年まで酷しい見解を発表して居られたようである。山の自然に対する他人の考えや地図の道すじの僅な誤りに対しては容赦なく追求した。一般人から見れば僅な誤りであっても，これに随ったために命をおとすこともあり，我々の研究の分野でも充分な準備なく，初動を誤ったためにとんでもない結論に達することがよくあるので，氏はこの辺のことをよく考えた上での正論であったと思う。氏が学者であり，毒舌家であり，またその風貌から推して，明治生れの一国者と見做す者があるとすれば，それはとんだ勘違いである。氏は先に逝いた何人かの

岳友の追悼文を発表して居られる。その一つに辻村伊助氏の遺著“スイス日記”に寄せた文があるが，友を思うの情切々たるものがくみ取られる。

10年前に植物研究雑誌で朝比奈博士の米寿記念号を出すことになった。この際に武田博士はサバノヲ属に関する論文をまとめられ，態々私の研究室まで届けに来られた。それまでも我々若い者と雑談するのを楽しみにして，偶には博物館へ来られたので，この際にも用件はすぐ済ませ，あとは平常通りの対話となったのであるが，氏は私の机上に挿してある園芸種のツバキを見ながら“小林君，是は東京のツバキでは無いね”と云われた。私は“船橋の自宅に植えてあるものです”と答えたが，内心大変に驚いた次第である。空気が汚れ，スス病菌がつき易い東京と，そうでなかった郊外では，そこに生ずるツバキの葉一枝の光沢でも見分けがつく氏の眼力には頭を下げざるを得なかった。その眼光の鋭さは決して伊達ではなく，芝居の役者の見えを切るのとは全然異ることを改めて知らされた。

氏が若い時から敬愛して止まなかった二人の学問上の先輩が居る，その一人は前記の朝比奈博士であり，他は白井光太郎博士であった。如何なる点でこれら両先輩に私淑して居られたかは，そのお二人の人柄を見れば直ちに判る。あえて蛇足を加える必要はないが，強いて一例を挙げれば，日本国の伝統を貴びその自然を愛したことである。武田博士は申すまでもなく英国人の血をひき，ロンドンの学校で講義をした経験もあったが，みだりに外国語を口にしなかった。話すことは歯切れのよい関東の言葉であり，文中には戦後の日本人には難解な程の文字や語句を使用して居られた。

氏の著作した高山植物関係の文や単行書がどの位あるか判らぬが，戦後間もない頃，氏が高山植物図譜を編集するに当って，それに入れるための高山生の菌や地衣の撰択について私の意見を求めに来られたことがある。従来多くの分類学者によって植物図譜，図鑑と称するものがつくられているが，その大部分のものは高等植物に限られ，シダ以外の下等植物は見向きもされて居らない。明らかに看板に偽りがある。氏はこの点をよく洞察して居られたのであろう。実を申せば，25年前に私共が尾瀬調査の対象の一つとして赤雪を選んだのも氏の尾瀬調査の記録にこれが載っていたからである。チャールスダーウィンのビーグル号航海記を見ると，アンデス山中で赤雪を観察しその主要素の学名を記しているが，学問上の最高峰に達するほどの学者は見識の点でも底辺が広いことを感ずる次第である。これに関聯して思い出すことがある。たしか関東大震災頃に出版された科学知識という雑誌の富士山特別号の武田博士による記事である。この中にコケモモの茎が膨大する銹菌による病気の図（たしか本草書より引用したもの）が載っていた。高山植物の学者はその病気にも注意するものだなと，中学生の私はひどく感心したことであった。

戦後になって私が第１回アラスカ極地調査を行い，その結果を科学博物館講座で報告したことがあった。その際，朝比奈，武田両博士はお揃いで出席して下さった。講演が

終り，お茶でくつろいだ際に，武田博士は“せめて小林君の鞄持ちでもして極地の植物を見度いものだね”と冗談を云われた。その時私は真剣に氏を極地のお花畑に御案内したいと考えた。そこにはセスナ機で真直ぐに3時間位飛んでも，なほ行き尽せない広さの尾瀬ヶ原が延々と続いていたからある。

私が氏に関して不思議に思っていることが一つある。それは，私の知る限り，氏は一度も外国の高山に登行しなかったことである。在英中に比較的容易に行けるスイスのアルプスにも訪れた様子がない，その頃，辻村伊助氏とアルプス登山計画がなされて居ったが，丁度水韮の発生研究中で，そのこと無しに終ったようである。終生日本の山に限った真意は奈辺にあったのか，遂いに伺うことが出来なかった。

ここに氏の面目躍如たる文がある。大正5年に日光へ訪れた際の記行文の一節である。“電車で馬返に着いた自分は，荷物をつた屋に托して馬で旅店まで送らせることとし，徒歩中宮祠に向った。此の辺も道が大そうよくなって，自動車を通ずる計画さへあるさうであるが，未だ其運びに至らないのは大に慶賀せざるを得ない。日光の人間がいくら物質的になったとて，中宮祠へ自動車を通ぜんと計画するなど実に以ての外な話しである。飛行器（原文の儘）が便利だからとて（日本では未だ中々さうは行くまいが）自分の首へ凧をいはひつけて大風に乗じて飛んで見る様なものだ。世の中には馬鹿な人間も数多あるが，中宮祠へ乗合自動車を通ずる様な考を起す奴は，鬼怒川へでも飛び込ん

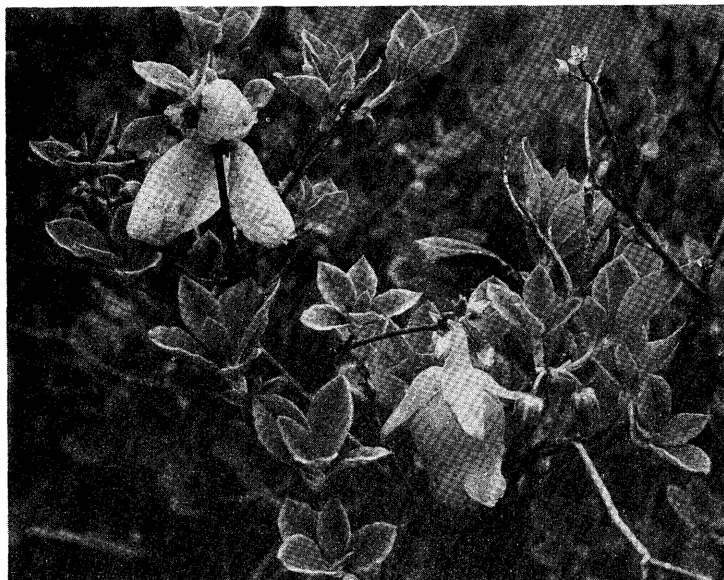


図 1.　武田博士撮影の，尾瀬ヶ原のウラジロヨウラク.

で死んだ方がまだ社会の為めになるだらう”。氏は逝去数年前に登行困難な尾瀬周辺の山の一つにヘリコプターで訪れているが，恐らく老境に入った人間の最後の希望として遠慮深く向ったに違いない。

同記行文には次の一節もある。“男体の下部も追ては此の（足尾の鉱山）毒霧毒風の為めに到底とり返しのつかぬ赤裸にされてしまふのだ。其頃には清滝附近の山は無論足尾の現在の状態と選ぶ所がなくなり，日光山の真の美点は何処に求めることが出来る様になるだらうか。水害は益々起り，山はくづれ，人家は流れ貴重だとかいふ人命は一抹の水泡と共にきえるのである。其時になって人の子は自ら植えた罪のために亡さるるのだ。そして喜んで成仏するのだらう。此の如く自然を虐げても我慾を逞うせんとする者が，自分と同じく，少くも形態学上から，人類として取扱はれ，社会や国家をなす分子であるのかと思ふと，もう一刻も早く人間をやめてしまひたい。そして青空を翔る白雲とでもなって残忍な人類の面上に天から唾してやりたい”。

武田博士が例の端正な姿で胸に勲章をつけている写真がある。多くの政治家共が1等の勲章を貰って得々としているのに比べ，何とつましい大きさよと慨嘆する者があるとすれば，余計なお節介であろう。高嶺の岩蔭につましく咲くサキシフラガの花をアクセサリーとして何気なくつけられたようにも思われる。

最後に博士から頂戴した一葉の写真を掲げて締め括りとしたい。尾瀬ヶ原で1954年7月2日に撮影したものである。ウラジロヨウラクにツツジノモチビョウキンが寄生したものと思われるが，何れ近日中に現地調査，確認の上，尾瀬ヶ原最初の記録にする積りである。　(国立科学博物館)

○高等植物分布資料 Materials for the distribution of vascular plants in Japan.

98　アカバナルリハコベ *Anagallis arvensis* forma *arvensis* 岩手県南部の胆沢郡衣川村下衣川に住む千葉タカ氏から，昨年末写真と種子を同封して，数年前から異様な赤花のハコベが，近くの麦畑に生えているが，正しい名を知らせてほしいとの照会があった。不明のまま本年試みに栽培観察したところ，6月中葉にコハコベの群落中に，赤花をつけた10 cmほどの目的植物が現れた。千葉氏から送られた約40 cmの同植物と生態写真など同封，国立科学博物館の金井弘夫氏に同定をお願いしたところ，意外にもルリハコベ（サクラソウ科）の一品種アカバナルリハコベとのご教示を戴いた。なお分布上参考資料となるので，当館の標本番号は TNS 370546 であると書き添えてあった。因みにルリハコベは小笠原や伊豆諸島，本州南部，九州などに知られた汎温・熱帯植物であるが，どうしてここまで北上したかは解明出来ない。終りにご助言戴いた金井弘夫氏並に生態写真家時田克夫氏及び資料提供者千葉タカ氏に謝意を表します。

(岩手県遠野市青笹町　小水内長太郎 Chotaro Komidzunai)。